

忘却現象に関する素人理論 — 記憶高進現象を基盤とした検討 —

Lay theories on the forgetting phenomenon

—From the standpoint of the hypermnesia studies—

林 美都子
Mitsuko Hayashi

北海道教育大学函館校
Hokkaido University of Education
hayashi.mitsuko@h.hokkyodai.ac.jp

Abstract

This article tries to reveal lay theories that Japanese university students have about forgetting phenomenon, from the standpoint of the hypermnesia studies. 140 subjects answered to guess what the result is when three successive tests without reviewing are conducted. 64 of them thought the scores would be in decrease. The reasons were that it naturally happens over time, the answers of repeating tests interferes with the rest of them, to review tests is necessary to improve memory or so on. Majority of them depend on the subjects' experiences. Compared to reasons subjects who guess the memory improvements have, they mainly take notice of obliviscence phenomenon, instead of reminiscence phenomenon.

Keywords — Lay theories, Forgetting phenomenon, Hypermnesia phenomenon

1. はじめに

本研究は、大学生にあまりなじみがないと思われる記憶高進現象をとりあげて、彼らが忘却現象に関してどのような素人理論を持っているか検討しようとするものである。

記憶高進現象(Hypermnesia)とは、復習や答え合わせなどの機会を設けずにテストのみを繰り返したときに記憶成績が向上する現象のことである(Erdelyi, 1996; 林, 2012 など)。先行テストでは思い出せなかった記憶項目を後のテストで思い出すレミニッセンス現象と、先行テストでは思い出せた項目を思い出せなくなるオヴリヴィッセンス現象という2つの下位現象からなり、レミニッセンスの量がオヴリヴィッセンスの量を上回った場合のみ記憶高進が生じる。

さて、記憶高進は、先行研究等からその存在自体には疑いはないと思われるが、いくつかの条件を満たした時にのみ生じる現象であり、テスト後

の復習が強調される通常の学生生活においては直感や経験に反し、また記憶高進現象を取り扱った日本語文献が少ないことから、多くの大学生にとってはなじみのない概念であると思われる。高橋(1996, 1997)によると記憶に関する素人理論は、個人の成長に伴って変化し、大学卒業生はほぼ専門家と同じような理論を持っているとのことであるが、記憶高進に関連した素人理論については先述の理由により発達していないと考えられる。

林(2014)では、復習の機会なしに記憶テストを3回繰り返した時に記憶成績が向上するか低下するか、一般的な大学生を対象に予測させたところ、2006年度はほぼ全員が低下すると予測したが、2011年度では30%の大学生が向上すると予測した。2011年に記憶成績の向上を予測した回答者にそのように予測した理由を自由回答形式で尋ねたところ、「検索努力」や「自然回復」などによって忘れた記憶項目が思い出されうることを指摘していた。林(2014)は、2006年度と2011年度の間に、世論やゲーム・小説、情報機器の発達等、発達や経験以外の要因で記憶の素人理論の変化が生じたことを捉えられた可能性があるとして述べている。

さて、林(2014)の研究では、記憶成績の向上を予測する理由については分析が行われているが、低下を予測する理由については分析が行われていないという問題点がある。低下の予測理由を明確にすることや両者の予測理由を比較することにより、記憶の素人理論についてより理解を深めることが可能となろう。そこで本研究では、2011年の調査において記憶の低下を予測した回答者のデータを分析することとした。

2. 方法

2-1. 調査協力者

心理学関連の授業を受講している大学 2,3,4 年生 140 名中, 成績の低下を予測した 64 名.

2-2. 調査用紙

A4 用紙の上部に, 3 回分のテスト用紙に見立てた長方形を 3 個印刷し, 長方形同士の間にある隙間に記憶得点が向上すると考えた場合は<, 変化しないと考えた場合は=, 低下すると考えた場合は>の記号を書き込めるようにした. また, その下に空白を用意し, そのように考えた理由について簡潔に記述するよう求めた. また, 記憶高進や **Hypermnesia** という用語を知っているかどうかを尋ね, もし知っている場合にはどのような現象であるか簡潔に説明するよう求めるものであった.

2-3. 手続き

心理学関連の講義で記憶に関連する授業を行う前に, 集団状況で行った. 調査用紙を配布し 3 回連続してテストのみを繰り返した場合に記憶成績がどうなると予測するか, 四角と四角の間に不等号で示し, なぜそのように予測したのか, 理由を余白に示すよう求めた. なお, 学習はテスト前に一度だけ行い, 学習後なんらかのディストラクター課題を実施してからテストをし, テストとテストの間に復習や答え合わせは行わず, テストとテストとの間はテスト用紙を回収したり配布したりするだけとし短時間に連続してテストは実施するものとした.

最後に, 記憶高進もしくは **Hypermnesia** という用語を知っているかどうかを尋ねた.

3. 結果と考察

記憶高進現象を知っている者は一人もいなかった. 表 1 には, 成績低下を予測した回答者の予測理由を分類し, 予測人数を示した. 時間が経

てば忘れるものなど「自然忘却」を理由とする回答が最も多かった($\chi^2(4)=47.35, p<.05$). 向上予測者のパターン(林,2014)とは逆で, オヴリヴィセンス現象に関する指摘がレミニッセンス現象に関するものより多かった(直接確率計算, $p<.0000$). 回答に「短期記憶」以外の専門用語が出現しなかったことや授業前であること等, いずれも調査協力者自身の経験を基本とした素人理論であると考えられる点は向上予測者と同様である. 本研究の結果, 下位現象のどちらに着目しているかで記憶成績の予測に差違が生じることが明らかとなったが, 何がその視点の違いを生み出しているのかについては, さらなる検討が必要である.

参考文献

[1] Erdelyi, M.H. (1996). The recovery of unconscious memories: Hypermnesia and reminiscence. Chicago: University of Chicago Press.
 [2] 林美都子(2012). 第5章「記憶高進 - 記憶に与える検索(テスト)の効果」川崎恵理子(編著) 認知心理学の新展開—言語と記憶— ナカニシヤ出版 71-89.
 [3] 林美都子(2014). 記憶現象に関する素人理論の時代変化—記憶高進現象を中心とした検討— 人文論究, 83, 85-90.
 [4] 高橋雅延(1996). 記憶現象に関する素人理論—質問紙法による基礎的データの収集— 聖心女子大学論叢, 87, 95-121.
 [5] 高橋雅延(1997). 記憶方略に関する素人理論Ⅱ—中学3年生と大学卒業生の場合— 日本教育心理学会大会要綱集, 39, 498.

表 1. 復習の機会なく3回連続テストを実施した場合に成績が低下すると予測した回答者 (n=64)の予測理由の分類(同一回答者が複数回答を行った場合は重複してカウントを行った)

| | 事由ID | カテゴリ | 予測関連事由 | 人数 |
|-------------|------|-----------|--|----|
| オブリヴィセンス関連 | F01 | 自然忘却 | 時間が経つと忘れるから(26) テスト毎にいくつかは忘れる(3) 印象の薄いものは忘れる(3) | 32 |
| | F02 | 検索による干渉効果 | テストを繰り返すことにより忘れる(8) 思い出せなかった項目を思い出そうとすることにより, これまで思い出せた項目がいくつか思い出せなくなるから(3) | 11 |
| | F03 | 復習の必要性 | 復習しないから(2) 暗記直後のみ覚えている(4) | 6 |
| | F04 | 妨害課題の影響 | ディストラクター課題のせいで忘れる | 4 |
| | F05 | 集中力の低下 | 集中力を失うから | 2 |
| | F06 | 疲労 | 休みがないから | 1 |
| | F07 | 誤答の生成 | 自分で作った答えを正答と信じる | 1 |
| | F08 | やる気の低下 | やる気を失うから | 1 |
| レミニッセンス現象関連 | R02 | 記憶の自然回復 | 次のテストでは2つ3つ新たに思い出しうるから | 5 |
| その他 | O03 | 系列位置効果 | 学習リストの冒頭と最後は印象深い(おぼえやすい) | 11 |
| | O04 | 短期記憶の影響 | 短期記憶は短時間しか情報が保てないから | 4 |
| | O01 | 検索項目の固定化 | 一度思い出せた項目は次も思い出せるから | 3 |
| | O02 | 先行テスト参照 | 前のテストの回答が参考になるから | 2 |